「オヤ〳〵、直暗だ。よく氣をつけてかへらないとおそろしいよ〳〵」

と、お母さん狸と赤ちやんの狸は、そのくらい間に逃げて、お山の奥にかへつてしまひました。

そして、お山の奥からポーンポーン、ポンポコポンと面白い太鼓をたゝいてゐました。ポチと白とは、おぢさんたちからひどくしかられました。

「見ろ、お前たちがいたづらをしたので、面白い踊も出來なくなつた。いやな、ポチだ。いやな白だ。これから誰も、このお山にはつれて來ないから、覺えてゐろ」と、ひどく叱られました。

お月様は、まだ、空でにこ〳〵笑つていらつしやるのは、お母さん狸と子狸が、村のおぢさんたちの眞似をして、「ポンポコどつこい、ポンポコナ」と踊るのが面白いからでせう。

ポンポコ　ポンポコ　ポンポコナ。　おしまひ

――昭和五年七月七日――

犬と猿が仲惡くなつた話

金子彦二郎
土田和雄

毎年森の中のけものたちは、ひとりの大將をえらぶことになつておりました。そうしないとみんなが喧嘩をするからです。

去年の大將は猿でした。

猿は、高い木の枝から枝へとヒョイ〳〵とんでは、いたづらをするリスの頭をコツン〳〵とたゝいたり、また喧嘩をする兎の耳を、ひつぱつたりして、とびまはることができるので、今年もなんとかして大將になりたいと思ひ、ひなたぼつこをしてゐる兎とリスのところへやつて來ました。

「やあ、兎さんにリスさんこんにちは」

「これは、猿さんこんにちは」

「どうです、今年も僕を大將にしてくれるでせうね」

猿が云ひました。

か、ふたりはいつも猿にいぢめられてゐるので

「今年は犬さんになつてもらはうと思ふのです」

とふたりは答へました。

「なに、犬さん」

猿は眞赤になつて怒りました。

が、そこはずるい猿、早速うまいことを考へつきました。

こんどは、狐のところへやつて來ました。

「狐さん、こんにちは」

「やあ猿さん、こんにちは」

「狐さん、今年は是非お前に吾々の大將になつてもらいたいと、みんなが云つてゐるぜ」

「いや、僕なんて駄目だよ、それよりも犬さんがいゝだらう」

「犬さん、あんな馬鹿になにが大將になんてなれるものか、それに、犬さんはお前のことを大變惡く云つてゐるぜ、あのお人好のリスや兎に、狐のやうな嘘つきなどえらばないで、俺を大將にしろなんて」

「猿さん、それはほんとかね」

「ほんとうだとも」

「よし、犬め、敗けてたまるものか、きつと俺れが大將になつてみせる。猿さんよろしくたのむ」

狐は、すつかり猿の言葉を信じて、カン〳〵に怒つてしまひました。

猿は、その足で、こんどは、犬のところへやつて來ました。

「犬さんこんにちは」

「これは猿さんこんにちは」

「犬さん今年は是非お前に、吾々の大將になつてもらひたいとみんなが云つてゐるぜ」

「さうかね、ありがたう、しかし、僕より狐さんがいゝだらう」

「狐さん、あんな嘘つきに、なにが大將になんてなれるものか、ところで犬さん、狐さんはお前のことを大變惡く云つてゐるぜ、あのお人好の兎やリスをだまして、お前のことを怒るだけでなにもできない大馬鹿者だ、あんな奴をえらばないで、今年は、是非俺れを大將にしろなんて」

「猿さん、いつたいそれはほんとかね」

「うそなんて云ふものか」

「よし、あの狐め、今年はどうしても僕が大將になつてみる、猿さんよろしくたのむ」

犬もすつかり猿の言葉を信じてこれもまたカン〳〵に怒つてしまひました。

やがて大將をえらぶ日が來ました。犬は待つてゐましたとばかり

「みなさん、今年は是非僕を大將にして貰ひたい」

「今年は俺れにしてもらひたい」

と、こんどは狐です。

「いや、今年は僕だ、狐のやうな嘘つきは大將になんてなれるものか」

「いや犬のやうな怒りつぽくて、そのくせ何もできないやうなものは大將になんてなれるものか」

「なんだ狐め」と犬はどなりました。

「お前こそなんだ犬め」と狐もまけずにどなりました。

すると猿、時分はよしと

「みなさん、喧嘩をするやうなものを吾々は大將にすることはできない、今年も僕を大將にしてもらはう」

さう云つて猿はうま〳〵と今年も大將になつてしまひました。

「なんだ、うまいことを云つてひとをだましておいて自分が大將になるなんて、馬鹿にした事だ」

犬はすつかり腹をたて

「いまに見ろ」

そう云つて、それからは、森をでゝ、今住む里へうつつてしまひました。

かうして犬と猿は、それから、すつかり仲惡くなつたのださうです。